エッセイ

「徳が先か、きずなが先か。それが問題だ」

平石　界（こころの未来研究センター助教）
Kai HIRAISHI

７月頭に南仏モンペリエで開催された「人間行動と進化学会」に参加してきました。夜９時までの研究報告のあと、まだ明るい街に繰り出して夕食をとり、ホテルでシャワーを浴びて寝て、翌朝また会場に戻る充実した５日間でした。

この学会、人間性の進化がテーマなのですが、中でも「徳の進化」が重要な問題となっています。実際、今年の学会の冒頭を飾ったのはサラ・ハーディ博士による協力性の進化にかんする講演でした。ハーディ博士は、霊長類研究者として、特に女性性、母性の問題について研究してきた方です。なぜ母性の研究が、協力性の話と結びつくのでしょうか？

しばしば「人間はなんて身勝手な動物なのだろう」とか「同じ種で殺し合いをするのは人間くらいだ」などと言われることがあります。しかし意外かもしれませんが、人間は、動物界の中でも抜きん出て協力的な存在です。たとえば人間ともっとも近縁な動物であるチンパンジー。彼（女）らもなかなか協力的だったりしますが、人間と比べると、その程度は小さいといわざるを得ません(本号の山本論考をご覧ください)。何が人間とチンパンジーの違いをもたらしたのでしょうか。

筆者、ポスターセッションの前で

奥に見えるのが「人間行動と進化学会」会場の建物

その回答の１つとして、家族や仲間が一緒になって子育てする「共同繁殖」が注目されています。これも意外かもしれませんが、母親以外が子育てに積極的にかかわる動物は、特に哺乳類ではほとんど見られません。父親も、祖父母も、おじ・おばも、子ども（孫、甥姪）の世話にそれほど積極的ではない。チンパンジーもその例外ではありません。

ところが南米に住むタマリンやマーモセットといった新世界猿は、共同繁殖することが知られています。そこで彼（女）らの行動を調べてみると、チンパンジーよりもずっと協力的であることが分かってきたのです。そこから、共同繁殖する動物（人間やタマリン）では協力性が進化する。すなわち家族の「きずな」から「徳」が進化したのではないかと考えられているのです。ハーディ博士の講演は、母性を研究してきた霊長類学者の視点から、こうした一連の研究を概論したものでした。

自分も父親として子育てにかかわるようになって数年。私はハーディ博士の話にすっかり感銘をうけていました。ところがその日の午後のことです。昼食後の講演は、ティム・クラットン＝ブロック博士。動物行動学の大家として知られる博士の講演もまた、人間の協力性の進化にかんするものでした。そこで博士はこう言ったのです（意訳です)。「朝の講演でサラ（ハーディ博士）は、共同繁殖が協力性を進化させたと言った。でもちょっと待ってほしい。逆の可能性も考えるべきなんじゃないか？　協力性の高い動物だからこそ、人間は共同繁殖ができるんじゃないだろうか」。そして博士は、自説を支持する大量の研究データを披露して見せたのです。

たしかに「共同繁殖する動物は、協力的である」という事実からは、どちらが原因でどちらが結果なのか、鶏が先か卵が先か、簡単には結論づけられません。「ティムの話ももっともだよね」「でもサラの話だって説得力あった」。その日の夕方、学会参加者の感想はさまざまでした。そうした様子をみて私は、これこそ科学の醍醐味だなと、軽い感動を覚えました。

どんなに有名でどんなに優れた科学者であっても、間違うときは間違う。だからこそ、自分が結論に至った道筋をすべて明らかにして、皆の意見を聴き、正面から議論する。それが科学という営みだと私は思います。「徳」をめぐる２人の対決は、南仏の青空の下、科学の姿をすがすがしく体現したものでした。